

まぼろし（ホーソンのイリュージョンより）：文苑

著者	水町，落村
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 1 7
ページ	3 3 - 3 9
発行年	1906
URL	http://hdl.handle.net/2298/5976

ま　ほ　ろ　し

水　町　落　村

我がまだ、いわけなかりし、十五の年の秋のなかば、さる事ありて、故郷を東に、百哩あまりへだてたる、さる山村の老牧師がり、しばし移り住むべき身とはなりぬ。

行きつきしあけの朝、我は村はづれ、さある櫛の森の中を、朝露ふみしだきて、たゞ一人、心ゆくばかり逍遙しぬ。九月の朝なりけれどそは恰も、七月のそれのごと暖かに、生ひ茂れる胡桃の木は涼しき朝風にゆらめきて、冷たきしづくのはらくと、心地よさは云ふべくもあらざりき。

日かげも洩れず、生ひ茂れる森の中に、たゞ一路、牛羊のために、開かれたるがありて、あたりにば、幼樹の叢と、岩石のころ／＼と横はれるがあるのみ。あな心地よき様かなと思ひつく、辿り行けば、珍らしや、とある泉のほとりにいでぬ、泉をめぐりて、春の朝に美はしき、光り示すらむ緑の小草はなやかに、上には大なる櫛の大枝、茂りに茂りて、此を洩るゝ光線の一とつ、水面を射るあるは、恰かも、金魚などの泛游するかとばかり思はる。

げに我は、幼き時より、泉を見る事をば、此上なき樂の一とつとはしたるなりき。まろらかに、水を湛わたる此の泉は、周圍こそ大ならざれ、深さはいとゞ計り知られず、四邊には、淡紅、白、褐その他いろ／＼の石、或は苔に被はれたるもあり、底には白き砂、寂しき日光をうけて、いとどしく澄める水の美はしさを増す。と見るに眞白き砂地の一點に、水迸り出で、砂を揺り動かしたつ。されど澄める水を濁らすとにもあらず、又玻璃などの如く、平らかに静けき水面を、乱だすとも

あらず。此の時、我れほのかに、森の精のこりたるや、はた、泉の神の、そと美はしき人に化して薄き水苔のましろき上衣を身にまとひたるが、七色紅の帶うるわしく、冷たく、静けき容貌して、ふと我に、近づくらむかとも思ひぬ。

若しその女神、石上に坐して、その眞白き足して、小波を打ち、水を跳らし、虹の七色影うるはしく、此に寫すを見る者ありたらむには、こをほたいかにか、感じたりけん、震ねか、樂みか、あらず、怖れか、彼の女の手をふるゝすべて、草と云はず、花と云はず、苔と云はず、岩と云はず、恰かも、朝露のあまねきに逢ひたらむ草木のごと、濡はさるゝならむ乎。また彼の女、たすき掛けの婢と身をやつして、落葉、汚木、くされて落ちし、二年栗、と枯藻のすべてを掃ひ除けて、煌める砂輝く水、すべて美はしき、水晶宮の様となすらむを、若し好色のたわれ者、美はし姫の、衣の香したふと袂しとらば、消れて跡なき石の上に、かゞやく露の一滴、そもまこと、ありうべからざる事にあらず。

かくて我れ、泉の女神現はれば、此所ぞと思はるゝあたりの、草のみどりにより偃して、稍やすこし、身を屈めんとする時、水の面に映し出だされたる一双の眼は、はしなく我が眼と行きあひたり此は已が眼の反射なりき。ふと、此の時、水中の我が影より、稍や深き所に、確かならねど、怪しや朦朧たる、また一つの顔、金髪の束やや乱れて、笑ましげに、清き一小女の美はしき顔。

水はたばろやかに、此の時日光をうけて踊る、その微かに匂へる、薔薇色の頬を透して、きらめける砂、かくれたる魚の、かすかに呼吸するも見ゆ、寂し日の光り、金髪の輝きと和して、搖ぎたへ

ぬと思ふせつな、その頭のあたり、今更に新らしき、美はしき光となりて、ふと現しぬ。美はしやど、思ふともなく眺め入るに、影はすぐに消れて、泉のみ、たゞ淋しげに残れり。

あゝ、そと現はれ、又そと消れて去にたる其の影よ、あまりの不思議さに、我はしばし夢見る如き心地となりぬ。切にその幻、再び形を現すべく、心に期しつつ、いと靜かに靜かに、心して、身のゆらき、呼吸の搖ぎをしづめつ、なほ暫時そこに坐しぬ。ともすれば、破り去られむとする靜寂を心して保ちながら、我はかの幻に就て、いたく我が思をこらしぬ。

影は正しく、小供等が、眼瞼の下にはしいまゝに作るが如き、夢のそれなりしか、はた、そと現れて、又そと消れ去りし其の間の、あまりに短かかりし故、我が眼はそを、此上なき者と認めたるか水の女神か、森の精か、戀に狂ふて、淵に沈みし小女の靈か、はたまこと、生ける美はし花の乙女の、徐かに我が背后に忍び寄りて、その優し姿を、水の面に映し出だせしなりしか。

やゝしばし、我はかく思ひつゝ、岸に坐せしが、一度消れし幻は、遂にふたゝび、現はるゝ事なかりき。心残りになたへで、戀人の、まがきに忍びよるがごと、その日の午后、我は再び、泉のほとりにたちぬ。常のごと、水は迸り、砂はきらめき、日光は穩かにその上にかゝやけり。されど我は終に再び、かの幻を見るに由なかりき、たゞこの寂地に、所なたる一疋の大蛙、突如、足下よりとびたちて、石の下にかゝみぬ。總て身を包みかくして、たゞ長き兩脚を現はせるのみ。我はその魔にも似たらむ、怪しき影を見たる時、かの幻の美はし姫を泉の中にとちこめて、現はれざらしめし者は、此れにこそと思ひて、切りても捨てまほしく思ひぬ。

思ひこゝに至りては、心中の我がかなしみ、げに耐ふべからざるに至りぬ、吐息して、そと我は立ち上りぬ。一むら木立の鬱々たるをへだてゝ、はるかに我が教會堂の塔見ゆ、樹々の梢、今落日の光り、まぶしくうけて、影は東に寂しく布きぬ。時は今刻々として、黄昏に近づきつゝある也。日光は哀しげに、而して反影は却りて、たのしげに見ゆ。光りと暗とは、今温和なる影の中に混じて、恰かも晝の神、夜の神等が、親しく手をとり交はして、全能の大御神の榮え、これを讃するにも似たる哉。

我れ徐ろに、この森のかげを踏みて、進みつゝよりし時、櫛の村木立の後ろに、一小女の影を認めぬ、寂しげに、日光を脊にうけて、夢かと思はかり、はるかに、ほのかに、地を離れて、精氣の如く見ぬぬ、我は、こは必ず、かの泉の幻ならむと思へり。

我はふりかへりて、腫を彼の女の上にこらしぬ、時にゆくりなく、木の葉を打つ音、甚だしく、俄雨一切り、降り切りぬ。雨の雫の、光りをうけて、美はしい哉一條の紅虹、一端をかの木立の上に延ばして、恰かも天の彩色が、此の小女を装ふべきために、現はれたるよと見ゆるばかり、かの幻の乙女をつゝみて立ちぬ。間もなく虹は消れて、小女の姿も、亦そこに見るべからざりき。あゝ彼の乙女、遂に美はしき、自然の飾り、虹の中に消れて、姿をかくし終りしか。さわれ、我はそと悲しまず、美はし虹のよそはひは、希望の神のかたちとも、我は思ひたれば也。

あゝされど、かくて消れて去にし幻の影は、遂にその後、再び我に現はるゝ事なかりき、時として我れ、かの泉のほとりに、森の中に、丘の上に、村の通ひ路に、あけぼの露の美はしき時、光りも

ゆらむ眞晝日中、しば／＼彼の女を索めて、憧がれありきぬ。されどそは盡く我に徒事なりき。週去り、月轉し、年移りても、その幻は、再び我に現はるゝ事なかりき。恨は永く、想は寂しく、久しく／＼我は一人かの幻に憧がれぬ。

あけの年正月、なかばすぎ、我は遂に、古郷に販り行かざるべからざる身とはなりぬ。せめては、この心の憂、少しなりとも晴らしやらむと、森を穿ちて、我はかの、思出の泉を訪ひぬ。時は三冬最中にて、泉の面は、氷かたく閉して、眼にふるゝ所、たゞ皚々たる白雪のみ。村木立ちうらがれて、丘の冬日、甚だしくも力なき哉、泉を去らむとして、我は心の中に思ひぬ、我れ若し心して、我が希望をふり立つる事につとめすば、我が心は、恰かもこの泉の如く、氷に閉されて、落莫遂に救ふべからざるに至るべしと。

その夕、晚餐を了へて後、獨り階上の欄によりてありき。日頃むつびし、なさけの思ひ、今別るゝに臨みて、ひし／＼と我が心をうごかす。別を告ぐべく、階下に降りぬ。戸を明けしせつな、隙渡る風颯と、ランプ消ぬぬ。

牧師一家の常例として、枯木燃へ切る時は、別に燈火など、用ふる事あらざる也、たゞ燃へたつ、焰を便りに、一家皆たのしきまごひにいる、收入うすぎ、聖職の此ひじりは、よく燈火の斜をも、得る事あたはざれば、樹皮をくだきて、之を燈火の代用となさしむる事もある也。此の夜も例の如く、樹皮を燃して、燈火の代りとなしつ、切りにいふ薪は、ほのかなる火光を被ひて、あたり皆、ほのぐらくなりつ、されど、我はすでに久しく此家に宿れる身なれば、牧師の椅子の位置、編物する

主婦の坐所、及び娘等の居所をも、それとなく察知する事を得たるなりき。暗の中に、我は我が、坐すべき所を求めて、勉強家なる、子息の隣りに、靜かに、腰を下ろしぬ。

暗の中にて、人は多く語る事を好まざる習ひなればか、我がこの室に入りて後しばし、話はとだへぬ、たゞ主婦が編みもて行く、針の音の規則正しきのみ暗の中に、冴へてきこへぬ、燃わたつ焰の時々きらめきて、老主人の眼鏡に、反射するのみ、此のさみしさの中に著しく見ぬぬ。その人々の有様あだかも、死せる後に、なほありし世の親しかりし情をわすれやらず、永久の交際を、つゞけ行くらむ様にも見ゆ。それとあきらかに、その人の顔を見るにあらず、音をきくともあらず、觸るゝともあらねど、心の中に、たしかに、それと感ずるのみ。

此の時、主婦は、靜かに聲を上げて、ラチエルと呼び何等かの話をなしぬ。此に答へしたゞ一聲のひびきよ、たゞ銀線の白玉に觸れたらむその時、發すらむ妙なるひびきの如く、いとく深く、我が心をうごかして、思はず知らず、椅子をはなれて、我はそと立ちあがりつ、耳をたてぬ。あゝその響よ、かすかなる、我が幻の面影を呼びをこし來りて、そを思ふ時、我か胸の血、盡くたどりぬ闇にとざされし、客間の中に、我はその人のいぶきをきく、又その人の面影を描き出すべく、あせりにあせりぬ。

ふと火は、いま、乾ける松の樹皮にうつて、室の内、あかくなりぬ、あなや、あゝかの泉の幻影、あゝかの虹と共に、消ね失せし花の小女子、今、其所に、光りの中に笑みつゝ、さながら天降りにし神の使のごと、輝き立てるを見たるその時、我は焔と共に、搖ぎて消ねて、あとなき夢となりもや

せむと、そと兩手して、掬ひも上げまほしく思ひぬ。あゝ、白玉の花の乙女よ。

かの泉のほとりに影を映し、虹と消ぬ去りし光りの小女。今は我が目の前に、面にはみてる悦ひの笑、頬にはばらの美はしき色して。床しい哉、君とそも何のゆかり。一瞬時、二人の親線は交はされて、あなや、ほのほの、火の光りの眼色、見しもしばし、燃えさしの薪くづれて、小女は再び暗にきぬ。

ラヤエルは、此の村の豪族の乙女、我がこの地につきし翌朝、遠きに去りて、今我が歸り去らむとする時、家に歸りて、再び我と出會せるなりき。

(ホーソンのイリュージョンより、九月はじめ)

野

調

黒髪

(友の妹君ナセの秋をもまたで逝き玉へる)

夕づく淡きかげやごし

匂流れし黒髪の

今はたあせてさ乱れや

夢のぬけから土にして

静にたほふ棺衣の――

天山愁郎

十七年の秋風は

未だ幼しわき萩の

み墓の露の根づたひに

泌みて――濕りの冷たさの

み空の魂にな通ひそ